

フェンシング・千田健太(文)がフルーレ世界「銅」 高円宮W杯、エジプトグランプリでも

中大フェンシング部の千田健太選手(文・3)が高円宮杯ワールドカップ(3月10日―12日・東京)の男子フルーレの個人戦(カテゴリーA大会)で銅メダルを獲得した。また1週間後のエジプトグランプリでも

3位、ワールドカップソウル大会は6位入賞と、連続の快挙を果たした。

エジプトの変

5月17日、千田選手はポルトガルの世界大会から帰国し、5日後には大分での強化合宿に参加、そのままワールドカップベネズエラ大会(結果は23位)へ、と強行日程をその後も続けている。フェンシングの世界大会は年に2回のワールドカップ、それに5回のグランプリがはさまる。第一線で活躍する選手は多忙である。

「ええ、最高でした」と、高円宮杯、エジプト大会の連続銅メダルの重みを笑顔で語る。「そうなんですけど、じつはハブニングもありまして」と、こんどは頭をかきながら続けた。

「エジプトの空港で、ホテルにパスポートを置いてきて、帰国が2日

遅れちゃいました。コーチにこっぴどく怒られましたよ」

銅メダリストは、笑顔の似合う、気さくな感じの人である。

右↓左利き矯正

フェンシングにはエペ、フルーレ、サーベルの3種目があり、千田さんは胴体が有効面で突きだけのフルーレの選手だ。父親(健一さん)が、フルーレの日本代表選手だったそうだ。中学1年からフェンシングを教わった。

「左利き」も父の教えである。フェンシングでは当時左利きがめずらしく試合も有利だったらしい。「生まれてつき右利きだったのですが、左がイイと、左利きの父に、むりやり矯正されたんですよ」

字は右手で書くが、ご飯は左手で食べるなど、常時左手を使う訓練。

「銅メダルも、左利き矯正のおかげですかね」と笑った。

五輪は父子二代の夢

「やつぱ北京、出たいっすね」と力がこもる。

父子二代の夢でもある。父・健一さんはモスクワ五輪の代表選手だった。1980年大会、ソ連のアフガン侵攻(79年)に抗議して西側諸国と共同で日本も参加をボイコット、五輪出場は幻になった。「それだけに、父の分も合わせて、ぜひともオリンピックに出たいですよ」

現在、千田選手は、日本ランキング1位、世界ランキング21位。好位置にいるが、五輪は種目ごとに各国2人まで。2人出るには世界ランキング8位以内が1人必要で、それは厳しいらしい。そのため、日本代表は実質1人になる。「太田雄貴(同志社大)」というライバルがいるんですが、がんばりますよ、絶対に」

サーベルを手にするフェンサーの、りりしい顔で言った。

(学生記者 大須賀美加||文学部2年)

